

ちょっと読んでみませんか（令和八年正月）

第79話『令和8年 今年の言葉』（本源寺住職 本間健司）

前回のプリント（令和七年秋彼岸号）では、自民党総裁選について少し触れましたが、結果は高市早苗さんが勝利し、女性初の総理大臣となりました。「智情意」を兼ね備えたリーダーの誕生によって、日本全体が何か新鮮な空気に包まれ始めたように私は感じています。この良い雰囲気今年もさらに広がっていくことを願うばかりです。

さて昨年（令和七年）十二月に、ある葬祭会社さんにご縁を頂き、その店舗で開催される法話会でお話しをさせて頂くことになりました。

『大切な方とのお別れのあとに“悲しみ”ということ』というテーマで、私が以前学んだことのある「グリーンサポート」（大切な方を亡くされた方への心のサポート）を基本として、仏教の教え、そして私の実体験を交えてながら九十分程お話をさせて頂きました。

法話会に参加された方は十人ほどでしたが、皆さんメモを取ったりしながら真剣に話を聴いて下さり、私にとっても貴重な学びの時間となりました。やはり葬祭会社主催ということもあり、ごく最近にご家族を亡くされた方もいらつしやっただと思います。

参加者の年齢層は、四十歳以上の方がほとんどでしたが、なんと九十代のご夫婦も参加されていたのです。

担当者の方にお聞きしてみると、そのご夫婦は毎回必ず法話会に参加されているとのことでした。しかも、会場まで徒歩でお越しになり、夫婦ともに熱心に聴講されているのです。私は驚きと共に、ご夫婦の“強い意志”のようなものを感じました。

江戸時代に活躍された儒学者の「佐藤一斎（さとういつさい）」（一七七二〜一八五九）は、次の名言を残されています。

少（わか）くして学べば、即ち壮にして為す」とあり

壮にして学べば、即ち老いて衰えず

老にして学べば、即ち死して朽ちず。(言志晩録六十条)

(青年のうちにしつかり学んでおけば、壮年になって必ず一事をなす。壮年において学ぶならば、老年になってもその魂は衰えることが無い。老年になっても尚学ぶならば、たとえ肉体が尽きるとも、その魂は輝きを増し続けるのだ)

仏教では、『三世さんぜの因果いんが』を説きます。

——「過去世での因があつて、現世での果がある。
そして、現世での因によって、来世での果が決まるのである」と。

つまり、この世での命はこの世が尽きたらリセットされるものではなく、来世へと、そして更なる次の世へと繋がっていく命であると、仏様は明らかにされたのです。

人生の最晩年においても尚学び続けることは、ムダどころか、むしろ次なる生への“偉大な種まき”をしていることになるのでしよう。

ゆえに、かつて国民教育の父と称された森信三(もりのぶぞう)先生は、次のように説かれました。

「この人生というものは、二度と繰り返すことのできないものである。

だからわれわれは、自分をもって生まれた能力を、

ぎりぎりのところまで発揮した上で棺桶に入る

というくらいの意気込みがなくてはいけないと思うのです。」

一説によると、ほとんどの人間は自分のなかに眠る潜在能力の数パーセントしか使わずに、この世での生を終えてしまうとのことだ。

逆に言うと、この世では決して使いきれないからこそ、次の世へと繋がるような生き方を最後の最後まで続けていくことが大切なのではないでしょうか。

この命が尽きるとも、この肉体が朽ちてしまっても、尚、魂は輝きを放ち続けることが出来る。
そんな境地を目指して、

令和八年 今年の言葉は、

死して朽ちず

にしたいと思えます。

本当の「冥途の土産」とは、自分自身で磨いた、自分自身の魂のことに他なりません。見栄や虚栄心はちよつと横っちょに置いておいて、この世での残された時間を想ってみませんか。

“棺桶に入る”その日まで、共に学び、共に実践して参りましょう！

皆々様にとって、更なる実り多き一年になりますように： 合掌 南無妙法蓮華經